

巻頭言

ポスト・コロナのコミュニケーション

臨床心理学部 学部長 香 川 克

ChatGPT が公開されたのは 2022 年の 11 月である。私自身は DX 対応にいつも遅れを取っているところがあるので、どこか対岸の出来事のように思えていたのだが、2024 年度に入ってから、いろいろな場面で AI を使用したような文章などを見かけることが急速に増えてきた。場面によっては様々なリソースを節約できるという利点は大きいようで、確実に「対岸の出来事」ではなくなってきた。

また、オンラインでのコミュニケーションもかなり深化してきている。私が専門とする学校臨床の領域でも、不登校の子どもたちへのサポートとして、「メタバースの中での居場所作り」のような試みが始まっており、今後、さらに広がっていきそうな勢いである。

おそらく、コミュニケーションの形をめぐって、数百年に一度の大きな変革の波がきているのであろう。数百年に一度どころではなく、もっと大きな波なのかもしれないと思う。少なくとも、これだけ膨大な視覚刺激に乳幼児期からさらされ続けるということは、私たち、特にこれから乳幼児期を過ごす子どもたちの、脳を含む身体は、全く新しい環境に対して生物学的に適応していく必要が出ているようにも感じられる。

一昨年巻頭言に「変わりゆくものと変わらないものがある」と書いたが、あれからわずか 2 年である。「果たして、『変わらないもの』はあるのだろうか？」と思えてくるほどの変化のスピードと変化の大きさに、圧倒されつつ過ごしているのは私だけではあるまい。

日本の労働人口のうち、49%の仕事が AI に代替することが可能になっていく、という推計が発表されたのは、2015 年のことである。この推計は、果たして現実化するのだろうか。少子化については予想通りの（そして、予想の中でもかなり急速な）変化が生じているが・・

はっきりしたことは私にはわからない。ただ、こうした変化が生み出す混乱の中で、人が誇りを失わずにいられることを願わずにはいられない。息子や娘が「うちの親の仕事は、○年後には無くなるんだって（AI で代替可能になるんだって）」ということをどこかで「教わってきた」ときに、親の誇りはどうになってしまうのだろうか？

臨床心理学の研究、臨床心理学部の研究が、「人が誇りを失わないで生きていられること」に貢献していくことを願っています。